

五輪・パライヤ

熱視線

③

競技会場にカラマツ材 佐久穂の「吉本」社長

由井 正隆さん (70)

昨年10月に完成し、東京五輪で体操、パラリンピックではボッチャの競技会場となる有明体操競技場（東京都江東区）。

日本オリンピック委員会（JOC）によると、内装、外装とも木材をふんだんに使い、東京五輪関連施設の中では木材利用率が最も高い。使われた木材は、南佐久郡や上小地域のカラマツ材だ。生産を手掛けたのは、木材加工や造林などの「吉本」（佐久穂町平林）。社長の由井正隆さん（70）は「信州産カラマツの良さを訪れた人々に発信し、国産木材の利用促進の起点となればいい」と期待する。

上田市や東御市、佐久穂町、川上村などの市町村有林のカラマツ材から、直径約30センチ、長さ約4メートルの丸太材約2千立方メートルを生産。これらを集材材に加工して作られた同競技場の長さ約90メートルの梁は、木製構造物としては世界最大規模という。

五輪関連施設の建設は、環境に配慮して管理された森林から伐採された「認証材」の利用が求められる。県産材を五輪施設に利用してもらうことを目指

信州産木材 発信の起点に

し、同社は認証材の加工や流通を手掛けるために必要な「COC認証」を2017年に取得。集材材への加工を手掛ける石川県の会社から発注を受け、森林組合などと連携して節やねじれが少ない形の良い材を選んだ。「林業の未来につながればと思つて認証取得などに取り組んできた。県産材利用が決まった時は心が躍った」

佐久穂町出身。明治大卒業

後、東京都内の商社で重機の販売や営業を担当した。祖父が創業した吉本を継ぐため、1997年（昭和48）年に帰郷。同社の社長に就任した。当時は木材の輸入自由化で安価な外国産木材が市場を占め、国産材のシェアが激減。林業に携わる人も減り、「かつて重要な経済基盤だった森の活気が失われ、地方から人が離れていくのを肌で感じ

た」と振り返る。林野庁によると、国内で消費される木材に占める国産材の割合を示す「国産材自給率」は、2017年は36・1%。02年の18・8%と比べると近年持ち直しつつあるが「まだまだ少ない」と由井さん。国産材の普及のためには「幼い頃から森で遊び、木造の家で暮らしてきた私のように、木造の学校や図書館で子どもたちが過いすなど、

将来の世代が木を身近に感じる機会を増やす必要がある」としている。県内では戦後に植えられたカラマツが利用に適した樹齢に達している。ねじれが生じやすく節が多いことから利用が進まなかったが、加工技術の向上などで、利用が注目されているという。国産材の不遇の時代を知りだけに「大事に守り育てられてきた資源が五輪で脚光を浴びるのはうれしい。有明体操競技場には、国産材の魅力を将来にわたって発信し続けてほしい」と期待している。

（吉野 貴哲）



「吉本」の敷地内にある木材置き場で語る由井さん。「五輪施設への県産材利用が決まった時は心が躍った」



完成し、報道陣に公開された有明体操競技場。梁に信州産カラマツを使った＝2019年10月、東京都江東区